

“ICM and Satoumi” Workshop 報告

第 11 回 EMECS (Environmental Management in Enclosed Coastal Sea : 閉鎖性沿岸海域の環境管理) の開会式の後の特別セッションとして、「ICM (Integrated Coastal Management : 統合沿岸域管理) and Satoumi」Workshop が 2016 年 8 月 23 日 (火) 午後、ロシア・セントペテルスブルグの Azimut ホテルで開催された。

最初、コンビーナーの柳から「この Workshop の狙いは、現在日本で行われている環境省環境研究総合推進費による S13「持続可能な沿岸海域実現を目指した沿岸海域管理法の開発 (2014-2018)」の途中経過 (<http://www.emecs.or.jp/s-13/>参照) を報告し、関連した諸外国の ICM と比較検討して、より有効な統合沿岸域管理法の確立を目指すことである」という趣旨説明を行った。

Workshop 前半は S13 関連で、まず柳から S13 の全体説明と現在までの主な成果を報告した。続いて奥田 (竜谷大) から S13 のテーマ 1 である「瀬戸内海の栄養塩濃度管理法」に関して、「透明度と基礎生産量の関連」に関する報告が行われた。さらに小松 (東大・大気海洋研) から S13 のテーマ 2 である「志津川湾における持続可能な養殖法開発」に関して、「カキ筏数の削減が養殖期間の短期化と夏季の底層溶存酸素濃度改善に貢献している」という報告が行われた。さらに吉田 (環日本海環境研究センター) から S13 のテーマ 3 である「日本海環境の国際管理法」に関して、「国際・国内・地域の三層管理が有効である」という報告が行われた。そして、仲上 (立命館大) から S13 のテーマ 4 である「沿岸海域の経済・文化・調整」に関して、「瀬戸内海の経済的価値が近年増大している」という報告が行われた。これらの報告に関して出席者から「社会科学の成果を統合数値モデルにどのように取り込むのか」、「環境の経済的価値は何によって決まるのか」といった質問があり、発表者との議論が行われた。

後半は世界の ICM 関連話題で、まず、根木 (環境省閉鎖性海域対策室) から「日本の沿岸海域環境施策の現状報告」が行われた。ついで、R.Summers (アメリカ・メリーランド大) から「アメリカ・チェサピーク湾における総量削減と海域環境改善の関連に関する報告」が行われた。さらに D.Nemazie (アメリカ・メリーランド大) から「フィリピン・ラグナ湾の健康診断に関する報告」が行われ、S.Suhendar (インドネシア・応用技術庁) から「インドネシアにおける Satoumi 創生運動の紹介」が行われ、最後に R.Kosyan (ロシア・Shirashov 海洋研究所) から「ロシアの沿岸海域分類に関する紹介」が行われた。

総合討論では「日本とアメリカの総量削減政策の違いは何か」、「各企業を総量削減に協力させるにはどうすればよいか」、「日本の海の健康診断とフィリピンの海の健康診断の違いはあるのか」、「海の健康診断の項目はどう決めるのか」、「海の健康診断を行う頻度はどう決めるのか」、「マイクロ・プラスチックを含む海洋ゴミ対策はどうすればよいか」などに関して活発な議論が行われ、今後、さらに ICM and Satoumi に関する国際 Workshop を続ける必要があることが確認された。